

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1、6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に 1、15の番号を付してある。

(配点 50)

1 着せ替え人形のリカちゃん(注1)は、一九六七年の初代から現在の四代目に至るまで、世代を超えて人気のある国民的キャラクターです。その累計出荷数は五千万体を超えるそうですから、まさに世代を越えた国民的アイドルといえるでしょう。しかし、時代の推移とともに、そこには変化も見受けられるようです。かつてのリカちゃんは、子どもたちにとって憧れの生活スタイルを演じてくれるイメージ・キャラクターでした。彼女の父親や母親の職業、兄弟姉妹の有無など、その家庭環境についても発売元のタカラトミーが情報を提供し、設定されたその物語の枠組(注2)のなかで、子どもたちは「こっこ遊び」を楽しんだものでした。

2 しかし、平成に入ってからのリカちゃんは、その物語の枠組から徐々に解放され、現在はミニーマウスやポストベットなどの別キャラクターを演じるようになっていきます。自身がキャラクターであるはずのリカちゃんが、まったく別のキャラクターになりきるのです。これは、評論家の伊藤剛さん(注4)による整理にしたがうなら、特定の物語を背後に背負ったキャラクターから、その略語としての意味から脱却して、どんな物語にも転用可能なプロトタイプ(注5)を示す言葉となったキャラへと、Aリカちゃんの捉えられ方が変容していることを示しています。

3 物語から独立して存在するキャラは、「やおい」などの二次創作と呼ばれる諸作品のなかにも多く見受けられます。その作者たちは、一次作品からキャラクターだけを取り出して、当初の作品のストーリーとはかけ離れた独自の文脈のなかで自由に操ってみせます。しかし、どんなストーリーのなかに置かれても、あらかじめそのキャラに備わった特徴は変わりません。たとえば、いくらミニーマウスに変身しても、リカちゃんはリカちゃんであるのと同じことです。

4 このような現象は、物語の主人公がその枠組に縛られていたキャラクターの時代には想像できなかったことです。物語を破壊してしまう行為だからです。こうしてみると、キャラクターのキャラ化は、B人びとに共通の枠組を提供していた「大きな

ミニーマウス

※ 不定表現を含む。

物語が失われ、価値観の多元化によって流動化した人間関係のなかで、それぞれの対人場面に適合した外キャラを意図的に演じ、複雑になった関係を取り切っていくとする現代人の心性を暗示しているようにも思われます。

5 振り返ってみれば、「大きな物語」という揺籃のなかでアイデンティティの確立が目指されていた時代に、このようにふるまうことは困難だったはず。付きあう相手や場の空気に応じて表面的な態度を取り、ツクロウことは、自己欺瞞と感ぜられて後ろめたさを覚えるものだったから。アイデンティティとは、(外面的な要素も内面的な要素もそのまま併存させておく)のではなく、揺らぎをはらみながらも一貫した文脈へとそれらをシユウ(ソク)させていくこととするものでした。

6 それに対して、今日の若い世代は、(アイデンティティという言葉で表わされるような一貫したものではなく)キャラという言葉で示されるような断片的な要素を寄せ集めたものとして、自らの人格をイメージするようになっていきます。アイデンティティは、いくども揺らぎを繰り返しながら、社会生活のなかで徐々に構築されていくものですが、キャラは、対人関係に応じて意図的に演じられる外キャラにしても、生まれもった人格特性を示す内キャラにしても、あらかじめ出来上がっている固定的なものです。したがって、その輪郭が揺らぐことはありません。状況に応じて切り替えられはしても、それ自体は変化しないソリッドなものです。

7 では、自分の本心を隠したまま、所属するグループのなかで期待される外キャラを演じ続けることは、人間として不誠実であり、いい加減な態度なのでしょうか。現在の日本では、とくに若い世代では、どれほど正しく見える意見であろうと、別の観点から捉え直された途端に、その正当性がたちまち揺らいでしまいかねないような価値観の多元化が進んでいます。自己評価においてだけでなく、対人関係においても、一貫した指針を与えてくれる物差しを失っています。

8 現在の人間関係では、ある場面において価値を認められても、その評価はその場面だけで通じるものでしかなく、別の場面に移った途端に否定されるか、あるいは無意味化されてしまうことが多くなっています。人びとのあいだで価値の物差しが共有されなくなり、その個人差が大きくなっているために、たとえ同じ人間関係のなかにおいても、その時々状況ごとに、平た

くいえばその場の気分しだいで、評価が大きく変動するようになっていっています。

9 私たちの日々の生活を(ウ)カエリみても、ある場面にいる自分と別の場面にいる自分とが、それぞれ異なった自分のように感じられることが多くなり、そこに一貫性を見出すことは難しくなっています。それらがまったく正反対の性質のものであることも少なくありません。最近の若い人たちは、このようなふるまい方を「キャラリング」とか「場面で動く」などと表現しますが、一貫したアイデンティティの持ち主では、むしろ生きづらい錯綜した世の中になっているのです。

10 しかし、ハローキティやミッフィーなどのキャラを思い起こせばすぐに気づくように、最小限の線で描かれた単純な造形は、私たちに強い印象を与え、また把握もしやすいものです。生身のキャラの場合も同様であって、あえて人格の多面性を削ぎ落とし、限定的な最小限の要素で描き出された人物像は、錯綜した不透明な人間関係を単純化し、透明化してくれるのです。

11 (また)きわめて単純化された人物像は、どんなに場面が変化しようと臨機応変に対応することができます。(日本発のハローキティやオランダ発のミッフィーが、いまや特定の文化を離れて万国で受け入れられているように)特定の状況を前提条件としなくても成り立つからです。C 生身のキャラにも、単純明快でくつきりとした輪郭が求められるのはそのためでしょう。

12 二〇〇八年には、ついにコンビニエンス・ストアの売上高が百貨店のそれを超えました。外食産業でもファーストフード化が進んでいます。百貨店やレストランの店員には丁寧な接客態度が期待されますが、コンビニやファーストフードの店員にはそれが期待されません。感情を前面に押し出して個別的に接してくれるよりも、感情を背後に押し殺して定形的に接してくれるほうが、むしろ気をつかわなくて楽だと客の側も感じ始めているのではないのでしょうか。店員に求められているのは、(一人)の人間として多面的に接してくれることではなく、その店のキャラを一面的に演じてくれることなのです。近年のメイド・カフェの流行も、その外見に反して、じつはこの心性の延長線上にあるといえます。そのほうが、対面下での感情の負荷を下げられるからです。

13 (こうしてみると)人間関係における外キャラの呈示は、それぞれの価値観を根底から異にってしまった人間どうしが、予想

もつかないほど多様に変化し続ける対人環境のなかで、しかし互いの関係をけつして決裂させることなく、コミュニケーションを成立させていくための技法の一つといえるのではないでしょう。深くまで互いに分かりあつて等しい地平に立つことを目指すのではなく、むしろ互いの違いを的確に伝えあつてうまく共生することを目指す技法の一つといえるのではないのでしょうか。彼らは、複雑化した人間関係の破綻を「カイヒシ」、そこに明瞭性と安定性を与えるために、相互に協力しあつてキャラを演じあつていのです。複雑さを「シユクゲン」することで、人間関係の見通しを良くしようとしていのです。

14 したがって、外キャラを演じることは、けつして自己欺瞞ではありませんし、相手を騙すことでもありません。(たとえば、ケータイの着メロの選択や、あるいはカラオケの選曲の仕方、その人のキャラが決まってしまうこともあるように、キャラとはきわめて単純化されたものに違いはありません。しかし、ある側面だけを切り取つて強調した自分らしさの表現であり、その意味では個性の一部なのです。(うそ偽りの仮面や、強制された役割とは基本的に違うものです。)

15 キャラは、人間関係を構成するジグソーパズルのピースのようなものです。一つ一つの輪郭は単純明快ですが、同時にそれぞれが異なつてもいるため、他のピースとは取り替えができません。(また、それらのピースの一つでも欠けると、予定調和の関係は成立しません。その意味では、自分をキャラ化して呈示することは、他者に対して誠実な態度といえなくもないでしょう。D 価値観が多元化した相対性の時代には、誠実さの基準も変わっていかざるをえないのです。

(土井隆義「キャラ化する／される子どもたち」による)

第2問

次の文章は、佐多稲子の小説「三等車」の全文である。この小説が発表された一九五〇年代当時、鉄道の客車には一等から三等までの等級が存在した。「私」は料金の最も安い三等車に乗り込み、そこで見た光景について語っている。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 50)

鹿児島ゆきの急行列車はもういっぱい乗客が詰まっていた。小さな鞆ひとつ下げた私は、階段を駆け登ってきて、それでもい
くらか空いた車をとおもって、人の顔ののぞく窓を見渡しながら、せかせかと先きへ歩いていった。人の間をすり抜けてきた若い
男が、

「お客さん一人？」

5 と、斜めに肩を突き出すようにして言った。

「え、ひとり」

「たった、ひとつだけ座席があるよ」

「いくら？」

「(注1)
二百円」

10 「はい？」

「ちよっと待ってね」

座席を聞(注2)で買うのは初めてだった。が話は聞いていたので、私はその男との応対も心得たふうに言って、内心ほっとしていた。名古屋で乗りかえるのだったが、今朝まで仕事をして、今夕先方へ着けばすぐ用事があった。

15 座席屋の男はすぐ戻ってきて、私をひとつの車に連れ込んだ。通路ももう窮屈になっている間を割り込んで行き、ひとつの窓
ぎわの席にいた男に(ア) 目くばせした。

「いい席」

「ありがとう」

私はそつと、二百円を手渡して、坐席にいた男の立つてくるのと入れかわった。私は周囲に対して少し照れながら再びほつと

20

した。
長距離の三等車の中は、小さな所帯(注3)をいっぱい詰め込んだように、荷物などもこたこたして、窓から射し込む朝陽(朝陽)の中に、ほこり立っていた。

前の坐席にいた、五十年配の婦人が、私に顔を差し出して、

「あなたも坐席をお買いになったんですか」

「ええ」

「いくらでした」

「二百円でした」

25

「ああ、じゃおなじですよ」

先方も、私も、安心したようになって、そして先方はつづけた。

「つい、遠くへ行くんじゃないやね。二百円でも出してしまいますよ」

30

「そうですね」

発車までには二十分ぐらひはある筈だった。乗客はまだ乗り込んでいた。もう通路に立つばかりだった。十二月も半ばになつて帰省する学生もいたし、何かと慌ただしい往来もあるのだろう。どうせ遠くまで行くのだろうけれど、諦めたように立つたままの人もあり、通路に自分の坐り場所を作る人もある。その中をまた通つてくる乗客は自分の身の置き場を僅か見つける。そこへ立つて荷物を脚の下においたりした。丁度私たちの坐席のそばにきて、そこで足をとめたのも、まあ乗り込んだだけで仕方がない、というように混雑に負けた顔をして、網棚を見上げるでもなく、無造作に袋や包みを下においた。工員ふうの若い夫婦で、三つ位の男の子を連れ、妻の方はねんね(注4)こ神纏(神纏)で赤ん坊を負ふつていた。瘦せて頭から顔のほつそりした男の子

35

は、傍らの父親によく似ていた。普段着のままの格好だ。両親に連れ込まれた、汽車の中はこういうものだとしてもおもうように、おとなしく周囲を見て突っ立っている。が母親に負ふわれた赤ん坊は、人混みにのぼせたように泣き出しはじめた。はだけたねんねこの襟の下に赤い色のセーターを見せた母親は、丸い唇を尖がらせたようにして、ゆすり上げたが、誕生をむかえた位の赤ん坊はいよいよのけ反って、混雑した車内のざわめきをかき立てるように泣く。

妻と対い合つて立っている父親は、舌打ちをし、

「ほら、ほら」

と、妻の肩の上の赤ん坊をあやしなから肩をしかめている。袋の中から一枚のビスケットを取り出して、赤ん坊の口にくわえさせようとするのだが、赤ん坊がのけ反るので、まるで、押し込むような手つきになる。赤ん坊は却つて泣き立てる。

「何とか泣きやませないか」

夫は苛々するように細かいかん高い声で言った。妻の方は夫が赤ん坊の口にビスケットをねじり込むようにするときも、視線をはずしたようにしていたが、

「おなかが空いてるのよ」

当てつけるように言つて、身体をゆすつた。

夫婦の会話は、汽車に乗り込むまでに、もう二人の神経が昂つて、言い合いでもしてきた調子である。男の子はその間のびるようにして窓から外を見ている。出がけの忙しかったことごとくを感じさせるように若い妻のパーマネントの髪はばさばさして、口紅がはずれてついている。それがつんとしているので、妙に肉感的だ。夫は、妻の口調で一層煽られたように、

「じゃア、俺アもう行くよ」

と言つた。妻は黙つて視線をはずしている。

夫婦連れかとおもつたが、夫は見送りだけだった。黙っている妻を残して、夫は車を出て行った。出ていったまま窓の外にも顔を出さない。妻もまたそれを当てにするふうでもなく、夫が出てしまうと、彼女はひとりになった覚悟をつけたように、手さ

げ籠の中から何か取り出して、男の子に言った。

「ケイちゃん、ここで待つてなさいね。どこにも行くんじゃないよ。母ちゃん、すぐ帰ってくるからね」
父親の出てゆくときも放り出されていた男の子は、ウン、と、不安げな返事をした。

「ここにいらっしやい」

私は男の子を呼び、若い母にむかつてうなずいた。

「あずかってて上げますわ」

「そうですか、お願いします」

彼女はねんねこ状態の身体で、人を分けて出ていったが、そのあとを見て、男の子は低い声で、

「母ちゃん」

と、言った。遠慮がちに心細さをつい声に出したというような、ひとり言のような声だ。

「すぐ、母ちゃん来るわ」

と私が言うと、男の子は窓近くなつた興味で、不安をまぎらしたように、ガラスに顔をつけて母を追うのを忘れた。

やがて発車のベルが鳴り出した。母親はどこへ行ったのかまだ帰って来ない。が、それまで姿の見えなかった、若い父親が、ホーム側の窓からのぞき込んで、男の子を呼んだ。

「ケイちゃん、ケイちゃん、じゃ行つておいでね」

その声で男の子は、するすると人の間をホーム側の窓へ渡っていくと、黙つて、その窓に小さい足をかけて父親の方へ出ようとした。はき古したズツクの黒い靴が窓ぶちにかかるのを、

「駄目、駄目、おとなしくしてるんだよ」

窓の外からその足の中へおろして、

「握手、ね」

と、父親は子どもの手を握って振った。ベルが止んで汽車が動き出した。

「さよなら」

父の言葉にも、子どもは始終黙っていた。父親の汽車を離れてのぞく姿が見え、すぐそれも見えなくなると、子どもはちゃんと承知したように、反対側の私のそばに戻って、動いてゆく窓の外をのぞいた。母親はどうしたのだろう、と私の方が不安になった頃、彼女はお茶のびんを抱えて戻ってきた。もう私の他に周囲の人もこの親子に注意をひかれている。

「ケイちゃん、おとなしくしてたの」

母親に呼ばれて、男の子はそれで殊更に安心した素ぶりを見せるでもなく、ただ身体を車内に向けた。

彼女は、言い合いのまま車を出ていった夫が、やっぱり発車までホームに残っていたということを知らずにいるのだ。A
か私の方が残念な気がして言い出す。

「汽車が出るとき、子どもさんはお父さんと握手しましたよ」

すると、彼女は伏目に弱く笑って、

「そうですか」

90
そしてしゃがんで、手さげ籠の中をごそごそかきまわした。毎日八百屋の買物に下げていたらしい古びた籠である。何かごたごたと入っている。もうひとつの布の袋からも口からはみ出すようにして、おしめなどのぞいている。その二つが彼女の持物だ。

「大変ですね」

と言うと、鼻をすすり上げるようにして、

「父ちゃんがもう少し気を利かしてくれればいいんですけどねえ」

95
そう言っつて、ミルクの缶や、小さな薬缶や牛乳びんなどを取り出した。彼女は買ってきたお茶で、赤ん坊の乳を作るのだ。私
のとなりの坐席にいた会社員らしい若い男も、席を詰めて、彼女の乳作りの道具をおく場所をあけてやった。彼女はうっとうし

い表情のまま粉乳をお茶でといた。背中の赤ん坊が、ウン、ウン、と言ってはね上る。私は彼女の背中から赤ん坊をおろさせて、抱いた。

「どこまでいらつしやるんですか」

「鹿児島まで行くんです」

「赤ちゃんのお乳を作るんじや大変ですね」

「え、でも、東京へ来るときは、もつと大変だったんですよ。赤ん坊も、上の子もまだ小さいし、それでもやつぱり私、ひとり

りで連れてきたんですよ」

やがて彼女は三人掛けの端しに腰をおろして、赤ん坊に乳をのませた。

乳をのませながら、彼女は胸につかえているものを吐き出すように言い出した。

「男って、勝手ですねえ。封建的ですね」

三人がけのそばの会社員の男は、おとなしそうな人で、彼女の、封建的ですね、という言葉で、好意的に薄笑をした。

「去年、お父ちゃんが東京で働いているので、鹿児島から出てきたんですよ。東京は暮しにくいですわねえ。物価が騰くて、どうしてもやってゆけないんですよ。お父ちゃんが、暫く田舎に帰っておれ、というので帰るんですけど」

私の前の中年の婦人も身体を差し出してうなずいている。男の子は母親から貰ったビスケットを食べていたが、いつか震動の継続に誘われて私の膝で居ねむりを始めた。

「すみませんねえ」

と言いながら母親は話しつづけて、

「何しろ、子どもが小さいから、私が働きに出るわけにもゆかないし、しょうがないんですよ。正月も近くなるでしょう。田舎に帰れば、うちが農家だから、お餅ぐらい食べられますからねえ」

彼女は気が善いとみえ、見栄もなくぼそぼそと話す。三等車の中では、聞えるほどのものは同感して聞いているし、すぐ

その向うではまたその周囲の別の世界を作って、関りが無い。B 彼女は二人の子どもを連れ、明日までの汽車の中によろやく腰をおろしたふうだ。

ホームで妻子にあのような別れ方をした夫の方は、あれからどうしただろう。男の子とそっくりの、痩せて、顔も頭もほっそりした男だった。今日の気分の故か癡性な男に見えた。彼は外套のポケットに両手を突っ込んで、今日一日、行き場を失ったように歩きまわるのかもしれない。彼は氣持の持つてゆき場もなく、無性に腹が立っているかも知れない。彼は映画館に入るだろうか。焼酎をのみにはいるだろうか。部屋へ帰れば、この朝、慌ただしく妻子の出で行ったあとがまだそのまま残って、男の子のメンコなどが散らばっているかもしれない。彼はそれを片づけながら、ちよつと泣きたくなるかもしれない。口紅がずれてついていた妻の、つんと口を尖がらして横を向いていた顔が、苛々と目の前に出てくるだろうか。彼はひとりでふとんを引きずり出して転がり込む。ふとんの襟に妻子の臭いも残っている。彼は、彼の方にしようとして、汽車の窓に片足をかけた小さい息子のズックをおもい出すだろうか。その時もうこの汽車は、山陽線のどこかを走っている。彼はもうすっかりひとりになった実感におそわれて、ふとんの襟をやけに頭の上にすり上げるだろうか。

私は闇の坐席を買った罪ほろぼしのようにせめて男の子を膝に抱いている。男の子のこっくりこっくりしていた頭を、私の胸にもたせかけておいた。が、子どもの眠りもやはり浅かったとみえ、少し経つと彼は頭を上げた。眠りから覚めても、この男の子は何も言わず、母親の居るのを安心したように外を眺める。この男の子のおとなしきは、まるでこの頃からの我が家の空気を感じ取って、気兼ねをしていたようだ。

「ケイちゃん、おむすび食べる？」

母親は片手に赤ん坊を抱えている身体を曲げて、片方の手だけで籠の中からおむすびを探し出した。母親に声をかけられると、男の子はにやつと笑って、それを受け取った。そして、丁度海の見えている窓に立ったまま、そのむすびを食べていた。

列車の箱の中全体が、少し疲れてきて、あまり話し声もしなくなっていた。汽車の音も単調に慣れて私には見なれた東海道沿

岸の風景が過ぎてゆく。

ふと男の子の何か歌うように言っているのが耳に入ってきた。小さな声でひとり言のつぶやきのように、それを歌うように言っている。汽車の音響に混じって、それは次のように聞えてきた。

「C 父ちゃん来い、父ちゃん来い」

しかし視線は、走り去る風景が珍らしいというように、みかんの木を追い、畑の鶏を見たりしているのだ。可憐かわいんに弱々しく、無心なつぶやきだけで、男の子は、その言葉を歌っていた。

(注) 1 二百円——当時、駅で売られていた一般的な弁当が百円程度、お茶が十五円程度だった。これらことから、私が運賃とは別に男に支払った二百円は現在の二千元から三千元にあたると思われる。

2 聞——聞取引の略。正規の方法によらずに商品を売買したり、本来は売買の対象ではないものを取り引きしたりすること。

3 所帯——住居や生計をともにする者の集まり。

4 ねんねこ絆纏——子どもを背負うときに上から羽織る、綿入れの防寒着。

5 誕生——ここでは生後満一年のことを指す。

6 ズック——厚地で丈夫な布で作ったゴム底の靴。

7 癪性——激しやすく怒りっぽい性質。神経質な性格を指すこともある。

8 外套——防寒、防雨用に着るコート類。

9 メンコ——厚紙でできた円形または長方形の玩具。相手のものに打ち当てて裏返らせるなどして遊ぶ。